

15歳の春、なりたい自分に

東日本大震災が起きた15年前、君は小さな赤ちゃんだった。
寝返り。ハイハイ。つかまり立ち。歩き始め。一つ一つの出来事が、かけがえのない宝物になった。

成長に伴ってアルバムの写真が増えていった。保育中に高熱を出した君を急いで迎えに行ったことも、学校で友達とけんかした君が泣いて家に帰ってきたことも、今では良い思い出だ。
中学に入ると、幼い頃と比べて口数が減った。けれど、強い意志を胸に秘めていることは知っている。日々部活動の練習に励んでいた。一人机に向かい、受験勉強に取り組んでいたね。

あの日から15年。
街は変化し、君は大きくなった。
震災に対する大人たちの思い、語られる記憶を、どこかで感じながら生きてきたのではないかなと思う。
君の進む未来が夢と希望にあふれていますように。
いつか、「なりたい自分」になれるように。

卒業おめでとう



多くの人を幸せにしたい



得意なことや社会に貢献する

あの日から、

それぞれの人生を奏でた15年

そして、これからも



東日本大震災発生から15年がたった。震災当時0歳だった子どもたちが15歳となり、中学校を巣立つ。時に迷い、戸惑いながらも、ひたむきに歩んできた日々。「なりたいたい自分」を思い描き、新たなステージへと向かう背中をそっと押したい。15年前、中高生だった若者たちは歳月を重ね、30代の大人になった。夢と現実の間で揺らぎつつ「なりたいたい自分」になった先輩たち。その姿を通じて15歳へのメッセージを贈る。あの日から16回目の春。それぞれの人生の来し方行く末に思いをはせ、新たな一歩を踏み出そう。



Contents

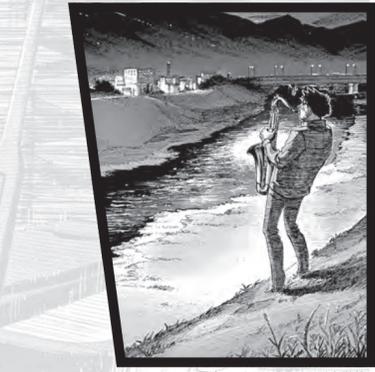
- chapter #01 明日の音色をつづるペン先
- chapter #02 はらかな夢への道 その一步を今
- chapter #03 積み重ねた努力が生む 明日への力
- chapter #04 仙台から世界へ羽ばたく
- chapter #05 石巻に響く元気な音楽

表紙/裏表紙
漫画『BLUE GIANT』の作者
石塚 真一さんによる特別描き下ろし

※過去の写真は本人提供です

#Prologue BE WHO YOU WANT TO BE

なりたいたい自分に



©石塚真一/NUMBER 8/小学館



漫画家という仕事を続けていきたいですね

「世界一のジャズプレーヤーになる」。人気漫画『BLUE GIANT』の主人公・宮本大がたびたび口にする信念だ。仙台出身の大は15歳でサックスを始め、高校卒業後に上京。欧州、米国へと渡り、「なりたいたい自分」を目指して突き進む。作者の石塚真一さんに作品に込めた思いや今後の抱負を聞いた。(聞き手は営業部 水野良将)

「世界一のジャズプレーヤーになる」。人気漫画『BLUE GIANT』の主人公・宮本大がたびたび口にする信念だ。仙台出身の大は15歳でサックスを始め、高校卒業後に上京。欧州、米国へと渡り、「なりたいたい自分」を目指して突き進む。作者の石塚真一さんに作品に込めた思いや今後の抱負を聞いた。(聞き手は営業部 水野良将)

「世界一のジャズプレーヤーになる」。人気漫画『BLUE GIANT』の主人公・宮本大がたびたび口にする信念だ。仙台出身の大は15歳でサックスを始め、高校卒業後に上京。欧州、米国へと渡り、「なりたいたい自分」を目指して突き進む。作者の石塚真一さんに作品に込めた思いや今後の抱負を聞いた。(聞き手は営業部 水野良将)

物語の舞台は仙台にしたいと思っただけです

「漫画家を志したきっかけは。学生時代の友人から、考古学者の漫画『MASTERキートン』を読んで憧れて大学に入ったというのを聞いて、漫画って本当すごいなと思って。素晴らしい仕事だなと思ったのが、最初に漫画に挑戦してみたいと思っただけです。」

「漫画家を続ける中で、葛藤や悩みはありますか。」

「次の一話はどうしようか」というところから逃げられないですね。見たこともない一番面白いやつを狙うんですけど、難しいですね。」

「『BLUE GIANT』を描き始めた経緯は。」

僕はジャズがすごく好きなんですけど、思ってるほど騒がれてないな。もっと若い人たちに人気が出てほしいはずだっ

明日の音色をつづるペン先

漫画家 石塚 真一さん

漫画『BLUE GIANT』スペシャルインタビュー

chapter #01 HEARTFELT MELODY

心に鳴り響く旋律

「今後、漫画家としてどう歩んでいきたいですか。幸いにもいろいろな人の助けを得て、漫画を描き続けてこられました。僕が思いつく一番いい仕事に就けたなと思っます。読者と会

石塚 真一(いしづか 真いち)さん

1971年、茨城県生まれ。『This First Step』で小学館新人コミック大賞一般部門に入選。『岳 みんなの山』で第54回小学館漫画賞などを受賞。2013年に『BLUE GIANT』の連載をスタートし、23年のアニメ映画化を経て、コミックスのシリーズ累計は1400万部を突破した。

BLUE GIANT 小学館の漫画誌『ビッグコミック』で2013年連載開始。中学の時、友人に連れられて見た行ったジャズの生演奏に魅せられた仙台出身の宮本大が、世界一のジャズプレーヤーを志す物語。ジャズ愛好者や仲間らと出会い、粗削りながらもテナーサックス奏者としての才能を磨き、成長する。 広瀬川河畔での練習風景などが描かれる仙台編バンドを結成し日本のジャズクラブでの演奏を果たす東京編に続き、欧州、米国、ジャズの聖地・NYと活躍の舞台を広げていく。

「自由を感じたんです。楽器をできる人たちがコミュニケーションを取ったり、表現したり。自由な部分が多い音楽で、とても感情に訴えるのを感じたんです。一言で言うところ「かっこいいな」と。ジャズを超えるくらいかっこいい音楽はないなと思ってます。」

「仙台出身の主人公や仙台の風景を描こうと思った理由を教えてください。」

「特に作品に込めてきた思いはありませんか。」

「特に作品に込めてきた思いはありませんか。」

「特に作品に込めてきた思いはありませんか。」

あの時0歳だった。今、15歳の真つすぐなまなざし

はるかな夢への道

その一歩を今



あの目から15年。15歳に成長した子をもたちが、まほい光を放っている。自分の信じる道を進み、目の前に立ちほだかる壁に果敢にチャレンジする。多くの人に笑顔を届けたい、人と人をつなぐ懸け橋になりたいと願い、地道に活動続ける。周囲への感謝の気持ちや、生まれ育った古里を元気にしたいという思いも、飛躍の推進力になっている。今はまだ「やりたい自分が見つかっていない15歳もいるかもしれない。でも焦らなくていい。目の前の大きな扉を開こう。その手に無限の可能性を携えて。」



私の歌で世界中の人に
喜びと感動を届ける

仙台市 上杉山中3年
声楽の国際コンクールで最優秀賞
星台 彩愛 さん (15)

12歳で声楽を始め、中学3年間で全国や国際コンクールで最優秀賞を取ることができました。復興支援コンサートに出演したり、復興支援CDに歌で参加したりしています。聞く人の心が少しでも穏やかになり、笑顔届けられたらいいなと思っています。今後の目標は、高校1年で全てのコンクールで1位を取ること。より多くの人に歌を届けたいです。



地域を活気づけられる
プロサッカー選手になる

宮城県女川町 女川中3年
ベガルタ仙台ジュニアユース
福原 義智 さん (15)

サッカーの面白さは点を取ることです。ポジションはFWです。小2の時、友達と一緒にサッカーをしたら楽しくてサッカーを始め、中学からベガルタ仙台ジュニアユースに入りました。高校からはベガルタユースに進みます。結果を残し続けてチームに欠かせない存在になりたい。将来は、地域を活気づけられるプロサッカー選手になります。



誰かに何かを
残せる人になる

宮城県気仙沼市 階上中3年
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 震災語り部
三浦 瑠々 さん (15)

小学生の時に震災の語り部の話を聞き、自分も誰かの記憶に残る話をしたいと思い、語り部活動に取り組んでいます。震災の記憶はありませんが、できる限り自分の言葉で、自分はどう思ったのか伝えられるように努めています。自分が誰かに伝える懸け橋となり、その先の誰かにも伝わり、という、誰かに何かを残せる人になりたいです。



自分を信じて
走り続ける

仙台市 宮城野中3年
全国中学大会陸上男子200mで優勝
クワジオ 大志 ウィリアム さん (15)

陸上は練習した分、速くなっているのを感じるのが楽しいです。一番大きな結果は、昨年夏の全国中学大会の男子 200m優勝。勝った時は喜びよりも先に安心しました。中学2年までは陸上と野球を両立し、野球が好きな気持ちもあります。これから先も、家族や仲間など支えてくれる人たちに喜ばせる活躍をしたいです。自分を信じて走り続けます。



力強い囲碁で
世界を目指す

仙台市 仙台中3年
小・中学校囲碁団体戦の全国大会で優勝
水田 理穂 さん (15)

幼稚園の時に囲碁を始めました。囲碁を通して全国の人々と交流し、自分の知らなかった世界を知ることができています。昨年7月の小・中学校囲碁団体戦の全国大会には宮城県代表として出場し、中学の部で優勝しました。中学生生活の大きな思い出です。高校でも囲碁を続けます。冷静で力強い碁を打ち、個人戦でも良い順位を取りたいです。

「やりたい」ってだけで…、十分じゃねえの？

「楽しそう」ってだけが、入り口なんじゃ

ねえの？ - 宮本大

— 大きな扉を開く。その手に無限の可能性を携えて —

未来を見据える、五つ光インタビューのより詳しい内容と動画はこちらから



あれから15年。大人になった少年少女

積み重ねた努力が生む

明日への力



石塚真一 / NUMBER 8 / 小学館

東日本大震災の発生から年月を積み重ねた30代の青年たちが、思い思いに今を生きている。次代を担う子どもたちを温かく育む。澄み渡る大空を飛び回り、見る者に感動をもたらす。一握りのプロの舞台でライバルとのきを削る。動物と触れ合い、命をつなぐ。十人十色の人模様。未曾有の震災が人生の転機となった人もいる。かつて思い描いていた未来とは違う道を歩む人もいる。いつもうまへんは限らない。それでも生きる。それぞれの明日に向かって。胸に宿した思いをさらなる飛躍への力に変えて。



笑顔の循環で
よりよい世界に

宮城県石巻市
ひの子ども食堂 代表
もり みさと
森 美聖さん (31)

高校1年の時、宮城県岩沼市の自宅が津波で全壊しました。以来、人のためにできることは何かと考えています。成人して移り住んだ同県石巻市で、不登校や学力低迷が深刻と知り子ども食堂を思いつきました。朝ごはんでは生活習慣が改善し笑顔が増えると実感しています。子どもたちが、やりたいことに挑戦できるお手伝いがしたいです。



夢、感動、希望、
そして笑顔を届ける

宮城県東松島市
「ブルーインパルス」パイロット
まつらら しょうや
松浦 翔矢さん (30)

大阪で中学3年だった15歳の時、大空を自由に飛ぶブルーインパルスの動画をユーチューブで見ると衝撃を受けました。「自分も操縦士になる」と決意したのが夢の始まりです。いくつもの壁を乗り越えられたのは、人を笑顔にし、感動や希望を届ける使命に意義を感じたからです。夢を諦めず挑戦する気持ちを大事にしたいですね。



繁殖農家として、
命のバトンをつなぐ

宮城県石巻市
畜産業
ささき みさき
佐々木 美咲さん (31)

小さい頃、畜産業を継ぐ気はほぼゼロでした。震災で被災した牛舎の復旧支援を受けて「恩返し」を考え始め、東京での事務所勤めを経て、今ここにいます。あの頃の未来予想とは違うけど、和牛繁殖を通じて命をつなぐことに充実感があります。予想もしない楽しい未来があるから、10代みんなはいろんなことに挑戦してほしいです。



感謝を忘れず
地元でプレーする

仙台市
東北楽天ゴールデンイーグルス投手
こんの りゅうた
今野 龍太さん (30)

震災が起きたのは岩出山中(宮城県大崎市)の卒業式の日。野球ができることは当たり前ではないと強く感じました。高校では野球部員が少なく、やめたい時期もありましたが、「今頑張れば最後には良いことがある」と信じて乗り越えてきました。プロになる夢をつかんだのは、恩師ら周囲の支えがあったから。常に感謝の気持ちを忘れずにプレーしています。



馬文化をもっと
いろんな人に広める

宮城県東松島市
乗馬クラブ従業員
おのてら あおい
小野寺 葵さん (31)

乗馬クラブで、引退した競走馬の余生を支える仕事に携わっています。昨年、女性の出場制限がなくなった「相馬野馬追」に、初めて愛馬と共に騎馬武者として出場しました。貴重な経験でした。今年も参加予定です。馬は家族。馬と触れ合うことが大好きで、仕事にはとてもやりがいを感じています。自分もその中で成長しています。

胸に宿した思いを、さらなる飛躍への力に変えて

突き進む、五つの熱意
インタビューのより詳しい内容と
動画はこちらから



行ける。
オレはどこまでも行ける気がする。

— 宮本 大



chapter #04 OVERFLOWING PASSION, AWAKENED EMOTION

熊谷 駿(くまがいしゅん)さん 仙台高専、甲陽音楽学院(神戸市)を経て、米国のパークリー音楽大を卒業、ニューイングランド音楽院大学院修士課程を修了。全国規模のコンサートを継続開催するほか、仙台の「ライブレストラン」Zの音楽プロデュースなども手掛ける。仙台市出身



少年時代は柔道にも力を入れた。中学では東北大会に出場。全国高専大会では優勝を果たした

感動を与えられるサクソプレーヤーになりたい。仙台市のサクソ奏者熊谷駿さん(34)が中学3年の時に立った志を胸に、飛躍の時を迎えている。紆余曲折を経てプロ活動10周年のコンサートに成功させ、海外公演にも挑戦。ジャズの魅力を広めようと思い進める。

仙台から世界へ羽ばたく

サクソプレーヤー熊谷駿の軌跡



音楽専門学校を卒業後、単身渡米した熊谷さん(左)。当初はコミュニケーションに苦労したが、ジャズの本場で学びを深め、多くの友人にも恵まれた

1月下旬、泉区の仙台銀行ホール・イマシティ21。プロ活動の集大成と位置付けたコンサートの大観衆の熱気に包まれた。音楽専門学校時代の恩師らとバンドを組み、定番曲「ダニー・ボーイ」や若手県陸前高田市の「奇跡の一本松」に着想を得た「マツ」、ジャズ風にアレンジした情熱大陸 など計15曲を演奏。力強い音色から都会的なサウンド、しなやかな和風の旋律まで多彩な音響かせた。子ども、家族連れ、高齢夫婦…。ステージから約1000人の観客を見渡し、感慨深げに語った。この10年やってきて良かった。たくさんの方に聴いてもらえるのはとてもうれしい。太白区八木山に育ち、10歳でサクソスを習い始めた。部活動の柔道部を引退し、受験勉強をしていた中3の秋の夜、偶然テレビで見たビッグバンドの演奏に心を打たれた。「すごくかっこいい」。サクソプレーヤーを目指そうと心に決めた。仙台高専から甲陽音楽学院(神戸市)を経て、ジャズの本場・米国へ渡った。父の「本気でプロになりたいなら本場に行け」という言葉が後押しした。「TOMODACHIサントリイ音楽奨学金」を活用して2014~19年、名門パークリー音楽大とニューイングランド音楽院大学院で、ジャズスタイルの「トビバップ」の研さんを積んだ。実技やアンサンブルの授業は楽しく、次第に友人もできたが、当初は言葉の壁にぶつかり極度のホームシックになったという。帰国後の活動拠点には仙台を選んだ。高専生だった11年の東日本大震災発生当時、音楽で古

「未来」を響かす調べ



笑顔が絶えない元気の仲間

「熊さん」コーチの和気あいあい小学生ジャズバンド 仙台市のサクソ奏者熊谷駿さんは後進の育成にも力を注ぎ、仙台市八木山小(太白区)の児童でつくるビッグバンド「夢色音楽隊」の指導に当たっている。現在のメンバーは小3~小6の計37人。平日朝と土曜に練習に励み、地域イベントなどで活動している。バリトンサクソスを担当する庄司夏規君(9)は「みんなで演奏して音を合わせるところが楽しい」と話す。ベースを担当する藤本悠さん(10)は「熊谷さんは優しく練習をサポートしてくれる。将来はいろんな楽器を弾いてみたい」と目を輝かせる。3月21日には八木山小体育館で2025年度の卒業演奏会を開く予定。連絡先は yumeiro.yagiya@gmail.com

里に貢献できずに不甲斐なさを感じた経緯もあり、僕が学んだジャズを届け、仙台を盛り上げようと思った。 そうした意気込みとは裏腹に、プロ生活はほろ苦い船出となった。地元仙台で開いた最初のコンサートの観客は約180人で、そのうち約8割が身内。名門音楽大を出てもチケットが売れない現実には衝撃を受けた。心が折れかけた経験もある。チケット発送から音響・照明の手配、当日の進行まで自らこな

もっと広く、もっと身近に

し、集客を増やしていた20年。新型コロナウイルスが猛威を振るい、コンサートもライブもできなくなった。「当たり前だと思っていた日常の大切さを実感した」。それでも首を屈けようと、オンライン公演やオリジナルアルバムの制作、サクソス教室でのレッスンに取り組んだ。プロ活動10周年の今年は、12月を目標に台湾で自主企画のコンサートを開き、アジアに進出する青写真を描く。「ジャズは大衆的な音楽。ファンを裾野を広げたい。節目の年に、仙台から世界へと羽ばたく。」

宮城県石巻、東松島町と女川町の小中高生でつくるバンド「石巻ジュニアジャズオーケストラ」が地域に明かりをともしている。東日本大震災発生から間もない2012年に始動し、被災地を中心に観客らを勇気づけてきたメンバーは「演奏を通して多くの人に元気を届けたい」と意気込む。

石巻に響く元気な音楽

被災地で笑顔で音楽活動を続ける

石巻市の石巻中央公民館で2月上旬、地元町内会の新年会が開かれた。オープニングにバンドのメンバー約20人が出演し、「バードランド」「シンク・シンク・シンク」といったスタンダードナンバーや「上を向いて歩

いろいろな年齢や性格、楽器のメンバーが合奏し、一体感が生まれる感じが好き。自分が演奏するステージで元気になることができる方々がいるのは幸せなこと」と、やりがいを見しめる。バンドは19年6月発足。復興

被災地の「今」と

Melodies that resonate with



誰かのパワワーになりますように



④力強くトランペットを吹く安倍さん ⑤バンド結成直後、地元のトリコロレ音楽祭に出演したメンバー

に奮闘する人々を元気づけようと、石巻市内で音楽活動に関わる小学校教諭ら有志が計画した。震災で楽器を失いながらも活動を続けていた宮城県気仙沼市のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」にも刺激を受けたという。当初のメンバーは初心者や吹奏楽部員らで小学5年~高校3年の計18人。サクソやトロンボーン、ピアノ、ドラムなど多くの楽器が寄贈され、大切に使いながら練習に励んだ。地元の定期演奏会やトリコロレ音楽祭のほか、仙台市中心部が舞台となる定禅寺ストリートジャズフェスティバルなどで各地で演奏を展開。15年3月11日には東京のチャリティーコンサートで、世界的なドラマー神保彰さんとの共演も果たした。

震災発生から15年。近藤さんは、震災後に生まれたメンバーもいる。震災がきっかけでバンドができたことを伝えつつ、郷土愛のある子どもを育み、学校で辛いことがあっても元気になるような場所として残したい」と語る。事務局兼コーチ

石巻市青葉中3年安倍凛さん(15)は中1の時、友人の勧めでバンドに入り、トランペットを担当している。「気が合う仲間が多く、みんなでまとまって演奏できるのが楽しい。高校に入ってもジュニアジャズで活動を続けたい」と笑顔を見せる。

現在小学5年、高校3年の計24人が活動し、バンドを卒業した先輩も後輩を支えている。楽曲のレパートリーはジャズの定番からティーン音楽、昭和歌謡まで幅広い。

バンドの草創期を知る現事務局兼コーチの近藤哲也さん(56)が振り返る。「子どもたちが人前で演奏すると、ものすごい威力があった。殺伐とした空気が流れていた被災地に、にぎやかな音楽が鳴り響き、お年よかな方ほど喜んでくれた」

石巻市青葉中3年安倍凛さん(15)は中1の時、友人の勧めでバンドに入り、トランペットを担当している。「気が合う仲間が多く、みんなでまとまって演奏できるのが楽しい。高校に入ってもジュニアジャズで活動を続けたい」と笑顔を見せる。

石巻市青葉中3年安倍凛さん(15)は中1の時、友人の勧めでバンドに入り、トランペットを担当している。「気が合う仲間が多く、みんなでまとまって演奏できるのが楽しい。高校に入ってもジュニアジャズで活動を続けたい」と笑顔を見せる。

石巻市青葉中3年安倍凛さん(15)は中1の時、友人の勧めでバンドに入り、トランペットを担当している。「気が合う仲間が多く、みんなでまとまって演奏できるのが楽しい。高校に入ってもジュニアジャズで活動を続けたい」と笑顔を見せる。

石巻市青葉中3年安倍凛さん(15)は中1の時、友人の勧めでバンドに入り、トランペットを担当している。「気が合う仲間が多く、みんなでまとまって演奏できるのが楽しい。高校に入ってもジュニアジャズで活動を続けたい」と笑顔を見せる。



chapter #05 FIND YOUR OWN SOUNDS

赤いベストに身を包み、ステージで演奏する石巻ジュニアジャズオーケストラのメンバー。住んでいる地区も学校も学年も異なるが、みんなで仲良く楽しく活動している



石巻ジュニアジャズオーケストラ「Swing Liberty Pirates」メンバーの条件は宮城県石巻、東松島両市と女川町に居住または通学する小学5年~高校3年。募集パートはアルトサクソ、テナーサクソ、バリトンサクソ、トランペット、トロンボーン、ギター、ピアノ、ベース、ドラム。演奏技術は問わない。原則週1回、日曜の午後1~4時に石巻市の石巻中央公民館で練習している。県内外で演奏活動を続けており、3月29日には女川町生涯学習センターで「Spring JAZZ Live 2026 in 女川」を開催する予定。ステージ出演の依頼や問い合わせ、楽器の寄贈はメールで受け付けている。連絡先はinfo@swinginstone.com